



図書館だより

No. 14

1987. 12.

上田女子短期大学附属図書館

図書館とわたくし

学長 西尾 光 一

近年の図書館の充実・発展はめざましい。国会図書館を頂点とする官公立図書館の充実は、わたくしどもの生活の身近なところにまで及んでいることに、この頃改めて気づいて力強く思っている。わたくしの住んでいる東京都杉並区の場合も、区内に、中央・永福・柿木・高円寺・宮前・成田などの区立図書館があって、各館共通の利用者カードがあり、コンピューターでつながっていて、貸出しにも応じてくれる。その他視聴者関係のレファレンスサービスがあり、読書指導もしてくれる。荆妻や愚息などもしばしば入館利用しているようだが、巡回する移動図書館もある由である。

わたくしは、架蔵の研究図書や勤先きの学内図書館だけで、精一杯で手が廻り兼ねているが、多年の研究生活の間には、国文学研究資料館・近代文学館・国会図書館・宮内庁書陵部図書館・内閣図書館・蓬左文庫・神宮文庫などの他、清泉・上智・山梨大・東大・京大・名大・早稲田・慶応・東洋大など各大学の附属図書館や国文研究室などでいろいろお世話になったことを有難く思っている。わたくしは物ぐさな怠け者なので、活発なフィールドワークをしたことがない。勉強は主に本のある場所ではかりしてきた

といえる。その意味で、図書館はわたくしにとって、勉強の母胎であった。

二

わたくしの図書館体験は、大正11年(1922)小学3年生の秋、松本から長野に移り、長野市の県町584番地に住んでいた頃から始まる。そこは、今は長野県経営者協会会館のある所で、道をへだてた正面に県の労働会館の大きな建物があるが、その位置に、浅い池を前にして木造二階建の旧信濃教育会の建物があった。その二階が広い一般閲覧室になっていて、わが家からは3分もあれば行けたので、長野に来たばかりで、近所に遊び友だちもないままに、放課後になるとその図書館に通って、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康など、戦国武将の伝記や合戦談などどうやら子供にも読める物語をふり仮名に頼りつつ読み進めたものであった。翌年、すこし離れた南県町の家に移ってからは、学校(長師附小)の児童文庫から昔話集や『十五少年漂流記』など、少年用の読み物を借りて読むようになった。そしてその頃、十数冊の乏しい自分の蔵書に紙のラベルを張って、図書館の真似をして番号などを記入して楽しんだこともなつかしい。

小学校時代は読書ずきの少年だったわたくしだが、上京して中学に入学してからは、学校の宿題や、野球・庭球などの運動に追われて、読書からやや遠ざかった。そのうち高校入試がせまってきて、英数国漢中心の受験勉強に集中せざるを得なくなった。その頃開成中学校庭の道灌山を切り崩して、その一部に新しく建てられた学校図書館に受験参考書を持って、毎日放課後に通ったものであった。図書館の若い司書で、夜学に通って同じく受験勉強をしていた出井君と親しくなり、色々話し合った。同君が日曜日に通っていた大きな受験講習会の全国模擬試験を同君が当日差支えがあったので、同君の代りにその受験票で受けたところ、三千人ばかりのうちの27番とかで、一高でも三高でも大丈夫との講評があって、同君を驚かせたこともあった。当時、家には幼少の弟妹がいたので、日曜日や夏冬の休暇には、上野公園内の帝国図書館（今は国会図書館の支部となっている）に通って勉強した。下落合の自宅から通うのに時間がかかったが、大ぜいが一生懸命研究や勉強をしている場所は一段と緊張して能率が上がった。高文受験の人々が幾人も来ていて、地下の食堂で想定問題をもとに盛に議論をしていたが、あの食堂の食物の臭いもなつかしい。上野図書館の他に、九段の大橋図書館や日比谷図書館などにもいったが、そうした図書館は本を借り出して読む場所であるとともに、勉強の場所でもあったことは今も同じであろう。

中学五年の頃は、思想的にも目覚めかけて、いろいろの書物や雑誌への興味が大きいに出てきたのであったが、そういう志向を押し殺して、英語や数学に集中、灰色の受験生活をする他なかったが、頭がやわらかで、伸び盛りの時に、そのようなことで、思うように読書できなかつたのは残念であった。合格という目的に集中した英数や国漢・歴史などの勉強は、それ自身張りのあることではあったが。

三

昭和6年(1931)4月、沈丁花の盛に匂う中を、浦和高校文科乙類(現在埼玉大学)に入学したが、しばらくは将来の志望も定まらず、混迷と雑読・乱読の日々を過した。

高校に入ってみると、大人びた同級生もいて、先生方もそれぞれにすぐれた学者らしく見受けられ、自分も一段と大人になったような気がしたが、わたくし自身の内実はまことにお粗末なものであった。

一年のはじめは寮に入った。6畳の一室に2人づつで、夜ふかし朝寝坊の寮生一般の生活習慣に、早寝早起きのわたくしはなじめないで、深更まで友人とだべった翌朝、皆は始業ぎりぎりまで寝ていて、食堂にかけ込むのだったが、わたくしはどんなにおそく寝ても、4時半には目をあけてしまい、6時頃まで無理にふとんの中にいるのは一寸づらかった。そっとぬけ出して早朝の雑木林の中を散歩した。

当時はまだ北浦和の駅はなく、学校の廻りは一面の雑木林と田畑で、家はたまに建ち始めたばかり、のどかな田園風景であった。武蔵野の雑木林の芽吹きがどんなに美しいものか、始めて目があいた。

昭和6年という年は、9月に満州事変が始まり、その後次第に我が国が軍国化し、学内にも左右のサークルがあって対立し、双方からひそかなさそいかけなどがあったが、わたくしはわたし1人の道を進もうと心にきめることができる程度には成長していた。放課後すぐ入浴し、夕食後は毎晩のように、埼玉県立図書館に通って、1人であれこれ読書したり、ノートをとったりするような日々を送った。そこには、高校図書館にないような本もあり、小説類も多かった。というと、勉強家だったようだが、夜道を寮に戻る途中、寮を出かけて、これから遊びに行こうとする同級生と出逢ったりすると、もと来た道を駅前の方に引き返し、安い酒を飲んだ

りしたこともあった。

二年の頃、通学生となったわたくしは、将来歴史をやろうと考え、歴史学研究会に入会して、神話学の松村武雄博士（英語教授）の指導を受けた。会員では、歴史学者として名をなした遠山茂樹・板倉勝正君が同期で、国文に進んだ会員に、同期の林大、金田一春彦両君がいる。わたくしも結局林・金田一両君とともに東大国文科に進んだ。

四

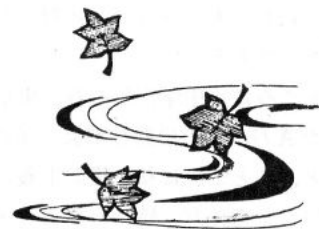
与えられた紙数がつきるので、以下さらに簡約にする。昭和9年（1934）大学に進んでみて、高校とは全く違う雰囲気驚いた。主任教授の藤村作先生以下、橋本進吉・久松潜一・池田亀鑑・守随憲治（後に島津久基）の諸先生が専任で、志田義秀講師があり、助手・副手に城戸甚次郎・笹野堅・岩淵悦太郎・鶴見誠・市古貞次氏がおられた東大国文科は、その頃は国文学界の中心としての権威と実力を備えていたことは新入生のわたくしにも追々わかってきた。当時東大国文科がこのような体制を備えていたのは、新潮社の『日本文学大辞典』の編集を進めてきたことのためもあったと聞かされたが、戦後は各地の国立大学や私立大学がさまざまに拡充発展し、新しいすぐれた学者が出、また時代別・ジャンル別の大小の学会が盛んになって、戦前の東大中心の様相がすっかり変わったのは、国文学界のために慶賀すべきことと考えている。

当時の東大文学部の講義は、8時-10時、10時-12時、1時-3時、3時-5時となっていたが、国文の主要な授業は、10時からと1時からであった。わたくしは朝8時に登校し、まず図書館の大閲覧堂に入った。数百の閲覧席と座席ごとに卓上照明が点滅できる設備や、ひじかけのついた大きな椅子があって、勉強には好適であった。毎日何冊かの本を借り出したが、時々森鷗外の蔵書印や自筆の書き込みなどのある手沢本にめぐりあったこともあった。橋本先生

の国語学演習の下調べのため、写本や江戸期の木版本を見る必要がでてきて、変体仮名や種々の漢字の字体にもなじみ、国文科の学生であることを自覚した日もきた。

一年次の時は、関東大震災の焼失で研究室はなく、図書館の西側の部屋に間借りをしていたのだが、二年次になって図書館の向い側に新しい文学部の研究室ができて、その3階に、国文学研究室と国語学研究室ができた。天井までとどく書棚に一杯つままった古書や新刊書にかこまれた大机に向って勉強しながら、わたくしは他日何とかして自宅の書齋をこのように専門書で埋めつくしたいと考えた。

卒業後大学院に残り、大図書館の書庫に入って自由に本を検索することができるようになったこと、国文研究室に勤務することになって研究室の図書や管理や整理をしたこと、さらには後年山梨大学教授として附属図書館長を兼ね、館の管理や運営に尽力したことなど、本稿を執筆してみて、改めてなつかしく思い出される。わたくし自身専門の研究者になってからは、図書館は書物持参の勉強場所ではなくなり、研究対象の書物の調査や複写をするため入館するだけになった。前に述べたように、叢書・全集・複製本など参考文献を次第に買い集めて架蔵し、又寄贈して戴くこともふえ、今は研究者としては多くの本を持つ1人となったが、前記の各方面の文庫・研究所や大学図書館にいろいろお世話になるようになってからのことは、紙数がつきで一切省略する他ない。本文を終えるに当たって心からの感謝を申述べたい。





思い出の一つ二つ

中山 渡

思い出と言っても「図書館だより」への寄稿。本にまつわることを書いてみよう。

。——。

学生の皆さんも体験にあることだろうが、一冊の本、一篇の作品によって自分がガラガラと崩れ、しだいに新しい世界が開けてきたということが、私にもある。その最初は中学四年、今風に数えると高校一年の時、芥川龍之介「一塊の土」によってであった。

芥川作品「杜子春」も「蜘蛛の糸」などは小学校時代に、文庫室と呼ばれた今の図書館で読んだ。小学生のこと、どこまで深く読めたかは疑問であるが、ひどく道徳的に読んで教訓を嗅ぎとっていた。そしては満足し、勸善懲惡を胸に刻みこんでいた。まだ、宮沢賢治の「注文の多い料理店」も「よだかの星」も、まして、「銀河鉄道の夜」など市販されていない時代、はるか後に知ったことであるが、初めての全集、文圃堂版の三冊本が刊行された昭和九年頃のことである。それを読んでも、たぶん教訓を嗅ぎ出して満足していたに違いない。小川未明や浜田広介の若い日のファンタジックな色合いの濃い作品を読んだ時ですら、そうだった。

この傾向は性癖となって、中学校に入学しても続いた。昭和初年の円本時代のはしりになった「明治大正文学全集」や「世界文学全集」が家にあったので、それらを大人に隠れて濫読しはじめたが、やはり教訓を嗅ぎとることに終わっていた。モーパッサンに対してすら、そうだったのである。

ところが、中学四年の春、東京から転校して来たA君、この早熟な都会っ子の彼は親友となると、ことごとに私の建前主義ともいえるもの

の見方や考え方、感じ方にまでメスを入れはじめた。スノップとかスノビズムといった私の語彙には全くない言葉すら交えて挑みかかってきたのである。高校生だった兄の影響だったのだろうが、Aの開明的な雰囲気はじわじわ私を揺るがした。その挙句に勧めてくれたのが「一塊の土」である。独立した二階建てとはいえ、学校の小さな図書館で、芥川の全集をひらいて勧めてくれたのである。

図書館で読み、借り出して家で読み、「後生よし」「貞女の鑑」と評判の老若二人の女の秘められた内面世界、意識の旋みに触れて、貧しい農村の生活を知っている少年らしく同情は寄せるものの、状況と人間、建前と本音などといった視点から芥川の開示してみせたものこそ人間的な真実と、目から鱗の落ちる思いだった。幾度となくAとこの作品を話題に、人間の内と外との分離を語り合いもした。いつか文学に教訓を嗅ごうとはしなくなり、「羅生門」を読んでも、〈黒洞々たる夜〉、その異空間に出ていった下人に共感こそあれ、いささかの反発もなかったことを覚えている。

余談ではあるが、五年の春、どうしても芥川の全集が欲しくなり、父にねだった。中学生に買ってくれるはずがなく、ようやく、修学旅行に行かずにその金で買うことで、父は折れた。学生時代にかけて、小説では芥川と佐藤春夫の二人を最も好んで読み、影響を受けたように思う。しかし、その様相は自分に分かるものではない。あのシニカルな芥川の目に、認識の方法としてやや疑問を感じるのは二十代後半のことで、あの日ようやく手に入れた全集は、学生時代に質草となり、そのまま流れてしまった。戦時下の放埒な酒代に化けてしまったのである。しかし、今は新版の全集が手元にあり、畏敬の

文人であることに変わりない。つい先日、七回忌を迎えた、その長男比呂志さんと同じ雑誌の仲間だったのも奇縁である。

芥川に導いてくれた A 君は、美術学校から戦場に行き、帰っては来なかった。

。——。

好きな本は買う。身近な場所に置く。これがいつか習性となり、ただでも狭い書庫に収りきらず、あちこちに散乱している。アメリカから来た友人が「むだだな」と頭をかしげ、図書館の効用を語って帰ったこともある。そんな合理主義も分かるが、また、いわゆる蔵書家愛書家の執念の美しさがあるわけではないが、欲しくなると買ってしまふ。そして、ツンドクがどうやら習い、性となってしまった。

そんな私にも、図書館にまつわる思い出も多く、受けた恩恵も多い。学生時代に渾大防小平先生の「明治文学」で尾崎紅葉たち硯友社の作品を読み、「我楽多文庫」を読む必要があった。大学の図書館にはなく、上野の図書館で読み、関連づけて「文学界」まで、そのいくつかの作品や評論も読めたことなど懐しい思い出で、後年のこと、「文学界」が復刻されると、すぐに購入したものだ。

その「文学界」にまつわる思い出であるが、もう二十年近く昔になる。北村透谷論を六か月連載という依頼をある雑誌から受けて、延べ二百枚ばかり書いたことがある。腹案を練っていると、例えば、巖本善治の「女学雑誌」と透谷や島崎藤村らの「文学界」の具体的な関連を究明する必要が出たり、透谷没後の上田敏を中心とする「文学界」の変貌の具体相を知りたくなったり、あるいは、その変貌に抵抗感をいだく藤村を雑誌の中で捉えてみたかったりして、日比谷図書館や近代文学館の世話になった。勤めの関係、夕方からであったり日曜であったりして、調査も研究も難行したが、とにかく必要な資料は手に入れられた。あの透谷論は貧しいも

のであるが、図書館の世話にならなかつたら、論考に微妙な肉づけもできず、ディテールのあやふやなものになってしまったに違いない。

図書館の利用では雑誌が多く、そこで単行本と初出の比較をしたり、単行本にも大系本などにも収められない作品を読んだりするのであるが、明治大正については、その時代の息吹き、鼓動を全く実感としては知らないの、文学享受、理解に現在を視点にしすぎて偏見が生じないとも限らない。それを避けるため、雑誌の後記や雑録、埋草まで丹念にあさっては耽読する。そんな時は図書館にいるのも忘れ、遠い明治や大正を遊行する思いに満たされる。

ところで、ここ数十年は復刻の全盛期、小説集や詩歌集だけでなく、雑誌を数多く復刻してくれる。遠くまで出かけなくてもよくなった。家の近く、散歩の範囲内に区立の図書館がある。そこにも坂口安吾や龍胆寺雄の全集まであり、数多くの復刻本の雑誌もそろえられていて、なんともありがたい。

ありがたいと言えば、複写機の開発と普及もありがたい。あれの現れたのはいつごろだったろうか。近代文学館に通って、明治二十一年刊行の「新撰讚美歌」を写しているある日、コピー機が入って、あつという間に複写完了。あの、あつけなさ、驚き、喜びの奇妙に入り組んだ感動は、いまだに忘れられない。あれは、新体詩の成立過程を追求し、鷗外らの「於母影」の翻訳詩と並んで、讚美歌の新体詩に与えた影響を調べていた頃のこと、四十二、三年頃だったろうか、明確な時期が思い出せない。とにかく複写機はますます性能がよくなり、ありがたい。

しかし、丹念に書き写さないせいか、彫琢の文章もその綾の美を看ることなく、リズムを聴くこともなく、目的意識だけで読むことが多い。こんな貧寒とした心になるのは私だけであろうか。私ひとりであってほしいものである。

(教授)



私のレクリエーション

犬飼 己紀子

最近になって、自然が恋しい、人恋しい。木の葉が色づきそして散っていくからだろうか。だとすると、私にも人並みの季節感があったのか、と嬉しくなる。こんな気持ちに素直になって先日、県少年自然の家で催された「自然に親しむ親子の集い」に母子4人で参加してきた。

さて、いつもの事ながら、思い立ったらすぐ行動、必切を過ぎているのを承知で申込み、当日は集合時間を大幅に遅れながら、1時間半の夜道、車を走らせた。そんな母親の癖をよく知っているのか、子ども達は到着後の鋭気を養おうと高いびきの車中である。真暗闇の山の中、一点の明りを目指し玄関に入ると、これ又小さな光の点、キャンドルサービスの、今まさに開始という時に到着をした。

ろうソクの明りが次第に増えると、100名程の親子が会場一杯に座っているのが、ぼんやりと浮かび上がった。テレビ、宿題から解放された子ども達。家事、仕事を一時おいた親達とは、どの顔も身体もはずんで見える。少年の家の先生方のリードで、歌にゲームに踊りにと、プログラムは進められ、「キャンドル・コンサート」ナガサカーモテキさんの独唱会で感激のうちに夜が更けていった。

翌日は、早朝からのキノコ採り。黄色い頭を見せるリコボウに感動し、クラフトの時間では栃の実笛のプローチ作りに加えて、それぞれが友達づくりにまで発展し、キャンプの総仕上げとなった。

分刻みで追われる毎日の生活を放り出し捨り出した余暇時間は、物心共に、たっぷりのみやげを抱えて大満足の子も達と、誰よりも私自身が最高に re-creation した2日間であった。

先日、山形県に出かけた折、時間つぶしに入った県立図書館で、学生時代に使ったテキスト「生涯体育論」を見つけた。次の一行を見て私はその懐かしい本を抱え閲覧室に腰をおろした。『人間疎外克服の第一歩は、自然への参加である。これを通じ人間の内面的な自然性を復帰させる事が可能になる。』

10数年が過ぎた今にして、私が言いたい事をストレートに表現しているこの本が、何と新鮮に思えた事か。何だか当時かきに不勉強な学生であったかを暴露するようだが、これも事実で仕方がない。ただ、毎日を雑事に追われ、貧しい余暇状況にありながら、自然や人との振れ合いに対し、欲求を持てたという事は、理論でなく、実践の方で身を持って学んでいたのかな、と自分を慰め、健康な精神である事を裏付けてくれたこの本に、改めて感謝をし席を立った。

昭和30年代以後、職業生活において週休二日制の導入等が進み、余暇時間が増大し続けている。それに伴い、仕事の分業化、単純化も進められた。人が機械化され、単純作業の繰り返して1日が終えていく。又、最近では商店で売り買いされる時の会話が、テープレコーダーから流れる「アリガトウゴザイマシタ」に変わったという話も聞く。こんな中で一言も喋らずに一日が終えていく生活があっても不思議ではなくなっている。こうして生ずる人間疎外に対し、前述の私のテキストは、「自然性を取り戻せ」と教えていたのである。

さて一方、逸早く週休二日制の導入を取り入れた企業等において、労働意欲の向上、人間関係の円滑化、活性化に結びつけることを目的とし、企業内レクリエーションを取り入れ、余暇時間を活用するところが増えてきた。当時D・リースマンは「オートメーション時代になれば、

仕事に生きがいを求めるといった事はあきらめて、人生はレジャーの中での創造的な活動に求めるべきだ」といっている。そして今、生きがいを仕事以外の時間(余暇)に求める人の数が仕事に生きがいを感じずる人の数を越えた。「生きるために働く時代」から「生きるなら楽しむ時代」そして「楽しむために生きる時代」が来たと言われる。

仕事に生きがいを感じ、遊びを悪としてきた世代の人々が、人生80年時代を迎え毎日繰り返されるあり余った余暇を抱えて生きがいすら見失いがちになる人がある。こんな状況を考えると、もはや余暇時間の効用は、企業における生産性効率、仕事から解放されての気分転換、余暇善用などといった経済的、道徳的な価値のためだけでは済まされなくなっている。

余暇こそ、人間性回復の時間として自己が主体的にかかわる活動のための時間とすべきではないのだろうか。

子ども達の世界に至っては、指図に慣らされ抑えられた生活に反抗すらしなくなり、やりたい事が何もない、自然欲求を持たない子が見られるようになっていく。教室に飾られたキンモクセイの香りを「トイレのにおいだ」と、しかも面をする貧しい感覚の小学生や、「汗をかくから運動は嫌い」と言う学生。彼等は、自分自身が人間性を失い始めている事にすら気付いていないのだ。この恐ろしさを、すべての大人に知ってもらわなければならないと思う。

。————。

第40回を迎えた昨年のレクリエーション大会で、—21世紀のレク運動ビジョン—の中から、各世代に次のようなメッセージが送られた。

- ・子ども達よ、遊びに生きよう。
(オモチャにかなわない遊びが、自然の中にある)
- ・少年、少女達よ、学校は楽しんでよいのだ。
- ・若者よ、自分で遊びをつくろう。

- ・若者よ、自分で遊びをつくろう。
(安易な遊びに走る事無かれ)
- ・お父さん、会社の中に逃げないで。
(会社人間になってはいけない)
- ・お母さん、あなたの時代がきています。
(女の時代を、きびしくそして楽しく生きよう)
- ・高齢者諸兄姉よ、開き直って遊ぼう。
(遊びのどこがいけないのですか)

少し乱暴な言い方は知れないが、私としても大いに共感するところである。

。————。

10月10日体育の日、第1回上田古戦場ハーフマラソンが開かれた。市の体育課から頼まれ、参加希望者と当たって見たが、体力強堅そうな目指す学生は、鼻で笑って一向に相手になる様子がない。参加者無し、とあきらめていたある日、走っている二人の学生を見た。「5kmかな?」と尋ねる私に「いいえ」と首を振る。「では10km?」と聞くと「20km走ります」と言いきった。心配する私をよそに「走ってみたい」との意志を曲げない。小柄で見るからに華奢な身体つきのこの学生のどこに走り切る力があるのだろうかど半分心配になった時、よし自分も走ってみようと考えていた。と言っても、ランニング嫌いな私は、子どもにかこつけファミリーコースの3kmマラソン、同時スタートだから二人との接点はある筈だ。スタート時よりも、20kmを完走する最後を見てあげたかった。

学生に奮い起こされ、子どもと走った3km、道中とところどころで真田十勇士に扮した役員に見守られながら走り通した。息絶え絶え走った30分間、どれ程の思いが頭の中をマラソンした事か。20kmランナーの学生二人は、何を考え、何を思ったのだろうか。ゴールに入った2つの顔は実に爽やかだった。

娘と走る私の姿を見つけた級友が、「来年は、一緒に走ろう!」と言った。この秋2つ目の大きくて爽やかなRecreationの一日だった。

(講師)

漫画と古典と



北川原 平 造

先頃頼みごとがあって、東部町の同窓生を訪ねた。彼は高等学校の国語の先生で中堅の働きざかりである。現況をいろいろ話すついでに、この頃は古典文学が漫画本になっている。そんなものが生徒の興味を引くのが現状だと情けない顔をした。どんなものか現物をみせてもらいたかったが、彼のところにあるはずはない。その時は憂うべきこととしてともども慨嘆したがあとになってよく考えてみると、そんなにおどろくことではないかもしれない。

というのは、その現状をやむをえないこととして肯定するのではない。「古典文学」を大仰に祭りあげるのに反発するのでもない。漫画というすぐ教育上好ましくないという形式主義にとらわれないで、もっとゆとりをもって、漫画も絵画のなかにおいて考えてみよう。類似現象として、平安朝において物語文学の内容の絵ときをするのは当り前のことだった。高貴な姫君が絵を鑑賞しながらお付きの女房がことば巧みに読みあげる（「語る」）のを聞くというようにして、物語が享受されたものであると説かれている（玉上琢弥氏の「物語音読論」を参照されたい）。物語は近代の小説と同じものとするのは問題があるが、近代の小説はもっぱら一人で黙読して味わうように出来ているのにくらべて、享受のし方が大いにちがう。「更級日記」の作者が、やっとの思いで「源氏物語」を手に入れて一人引きこもって夜昼読みふけたというのは、読み方としてはむしろ特殊であった。いずれにしても物語はその内容を描いた絵とあわせて味わうという点に注目したい。

源氏物語の「絵合」の巻では、冷泉帝の後宮で梅壺の女御と弘徽殿女御と二方に分かれて絵合せ（絵を出しあってその優劣を競う競技）に

熱をあげる。そこで「物語絵」というのは、物語の中の人物や事件を描いたもので、「長恨歌」とか「王昭君」から「竹取」「宇津保」「伊勢」などが登場する。絵は巨勢の金岡の子の相覧とか飛鳥部常則などの名手。その説明文は貫之や道風の筆。有名な物語を絵に仕立てて説明の文章が添えられている。

早く、奈良時代から中国より絵入りの典籍や画卷が伝来し、親しんできたが、それらから日本風の「絵巻」を工夫発明した。前記の絵合せに出された絵も「絵巻」の形だったと思われるが物語が絵を伴うという存在の様式が平安朝には行なわれていた。こまかいことを言えば、「源氏物語絵巻」のように一帖について一ないし三場面ぐらいが絵画化され、その絵に対応する本文が詞書として抜き書きされた形のもの、「伴大納言絵詞」や「吉備大臣入唐絵巻」のように絵巻物を繰りのべればストーリーに沿って画面が展開するものという差異はあるが、絵巻物という形式の作品で現存するもののうち、十二世紀前半に出来た「源氏物語絵巻」が古いものであるが、もちろんそれ以前にも同じような形で物語に絵が添えられていたであろう。

ところで、源氏絵巻のように「もののあはれ」の情趣を尊重するものでは、あくまでまじめな絵となるのは当然だが、なかにはひとつずらせば漫画に近づくものもないではない。例えば現存する「夕霧」の巻で夕霧が落葉の宮の母御息所からの手紙を読もうとするのを、てっきり落葉の宮からのラブレターと思いこんで妻の雲井の雁が奪おうと背後から忍びよる場面の絵などは、そういう意味で生動感がある。それが、「伴大納言絵詞」などになると、応天門炎上にあわてふためく人々の一人一人の表情、姿勢は迫真の



筆で描かれ、現今の下手な漫画の人物など足もとにも及ばぬ。また「吉備大臣入唐絵巻」の、最後の碁の勝負で吉備が相手の名人の黒石をこっそり飲みこんでかくして勝つが、疑われて訶梨勒丸（カリロクガン）（下剤）を飲まされる。吉備は超能力で碁石だけを腹中に止めて難をきりぬける。画面左端には吉備の排便を顔をしかめて検査する唐人たち。まさにその描写の絶妙さは抱腹絶倒である。

さて、ここまで述べてくれば、高山寺の「鳥獣人物戯画」を言わなければなるまい。周知の高名な絵巻であるが、当時の言葉で「戯絵（ザレエ）」とは、つまるところ漫画である。また「をこ絵」とも書かれている。この戯絵の絵巻の筆者は鳥羽僧正覚猷と伝えられる（実際は少くとも四人の画工の手になったものとみられている）が、この人は「今昔物語」の源隆国の第九子と伝えられているところからも、絵巻と説話文学との交渉の深さが察せられる。この絵巻そのものは、前述の既存の物語を絵画化したものとはやや性質を異にしているが、いわゆる漫画と称すべきものがすでに平安末期に出現していたことに対する世間の認識は高くないようである。そこではじめに戻って、古典文学の漫画化などといえば不謹慎のそしりを受けるのは当然というような点は、大いに考え直さなければならないようである。鳥獣戯画の成立については、小松茂美氏の詳細な論考があるので参看していただくこととして（中央公論社「日本の絵巻」6の解説）、「年中行事絵巻」のなかの風流笠（フリュウガサ）の造物（ツクリモノ）に鳥獣戯画と極めてよく似た画図を見出すことからしても、「鳥獣戯画」が全く孤立して出現したものではないと考えられる。さらに今昔物語、宇治拾遺物語、古今著聞集などに、猿・鳥・兎・狐・牛・猫・鼠・雀などがしきりに登場することと「鳥獣戯画」すなわち漫画の出現とは深い縁があるにちがいない。なお、説話と絵巻と

の出会いによって、文学としての説話の受けた影響の重大さについては、益田勝実氏の指摘があることももちろん無視するわけにはいかない（『説話文学と絵巻』古典とその時代Ⅴ）。

さて、その後の日本の物語文芸の発展をたどってみれば、およそ絵を伴わないものはないといってもよいだろう。江戸の小説類を見渡しても絵を中心とした草雙紙（クサソウシ）の類は当然のことながら、仮名草子から浮世草子も絵入の版本である。「好色一代男」の挿画は菱川師宣。（従来の解説は挿画をほとんど軽視しているなかで、上方版の画工は不明だが江戸版のそれは菱川師宣と記しているのは藤村作教授であった。注目に値する）。当時の作家は絵心のあることが必要で絵の構想を自らスケッチして画工に指示するぐらいであった。八犬伝の作者曲亭馬琴は絵はふえてだったそうで、黄表紙・洒落本・滑稽本などの著作もあるが、あまり絵を重要視しない読本（ヨミホン）において大成功をおさめたという伝えもある。その読本すらも挿画によって引立てられている。それは江戸の小説だけのことでなく、現代の新聞小説にしても毎日の掲載に挿画がかならず付されている。通俗文芸と純文芸という問題を忘れてはいけないわけではないが、小説文学に絵はつきものといつてよからう。

紙面の都合でごく大まかに述べてきたが、古典文学と絵画との交渉について従来の見方を一歩進めて、絵巻や挿画の果たしてきた役割を積極的に評価する方向がでてきてもよいのではなかろうか。日本文学の俳諧性（ユーモア）と戯絵という関係も考察されてよいだろう。玉上琢弥氏の、源氏を読みはじめて四十年、絵巻を眺めはじめて三十何年（昭和四十八年当時）、また日々に新たに感じられる、という語が身にしみる。時の移りとともに起きてきたものを積極的に受けとめていく姿勢は大切である。因みに「鳥獣人物戯画」は、現在国宝となっている。（本学講師）


 学生のひろば
 

劣等感だらけの私の音楽

幼児教育科2年 小林 恵 巳

私は、ピアノ講師になりたいと思って、この短大に入り、勉強をしてきた。そして、確かなレールの上に乗って、目標に達成する事が間近になった今、惰性だけでピアノを弾いている様な気がしてならない。自分は何故、何の為にピアノを弾いているのかわからなくなった。就職の為に、試験に合格する為にピアノを弾いている気がする。ピアノを弾くって……音楽をするって、そんな計算っぽい事じゃないと思う。本来「音楽」とは「音」を「楽しむ」事ではないか？。そんな考えはUtopia〈ユートピア〉でしかないのだろうか？。こんな曖昧な気持ちで講師になって、ピアノを学ぼうとする子供達に、本当に教えてあげる事ができるのか、自分には全く自信がなかった。

先日、この悩みをT先輩に話した処、返ってきた言葉がコレだった。「あなたの音楽には、優しさがある。それは、あなたの音楽が下手クソだからだよ。」……確かに、私は技術的にも音楽的にも下手クソだ。私は、自分の音楽に劣等感を持っている。T先輩が言うには、この劣等感を持つという事が、大切な事だと言う。人には簡単に弾けてしまうパッセージでも、私は何回も練習しなければ弾けない。手に入れたい物がすぐ目の前に見えているのに、私の場合、何メートルも遠回りをして、ようやく手に入れる事ができる。人より悩みながら練習した分……、回り道をして道草しながら色々な物を見た分、ただ何となく、何も感じないで弾いている人よりは優しい音楽を奏でられているという。自分が、果たして本当に優しい音を奏でているかなんて事はわからないが、劣等感を持っている分、確かに努力はしている。

劣等感を持つという事は、言い換えれば「自

分はもうこれで精一杯だ。」と思ってはいけないという事だ。例えば、棒高跳びの選手が「自分はここ迄の高さしか跳べない。これで精一杯だ。」と思ったら、そのジャンパーの記録も人間の成長もそこでストップしてしまう。「精一杯やった」という言葉は、自己満足と言いつの言葉でしかない。そして、もう一つ大切な事は「目標を持つ」という事だ。私の、ピアノ講師になりたいという幼ない頃からの夢が、短大に入り目標となった。目標を持っていたからこそ、何故ピアノを弾くのかわからなくなった時に挫折せずに済んだ。もう少しわかり易く言うならば短距離走の選手は、ゴールテープがあるからこそ、一生懸命走れるのだ。もしゴールという目標がなければ、あんなに早く走れないだろう。そう考えると、目標を持つ事が、どれ程大切か理解してもらえと思う。これを読んだ学生の皆さんにも、是非、目標と劣等感を持って、短大生活を有意義に過ごしてもらいたい。

私の場合、目標を達成するという事は、ピアノ講師になる事だ。人に教えて、お金をもらうという人は、いわゆるプロと呼ばれる。プロは自分の技術と自分自身に自信と責任を持たなければいけない。自分の音楽に劣等感なんて持っているはいけない。何故ならば、生徒は先生を信頼しているから……。しかし、私は劣等感を持ち続けていこう。いつまでも、優しいピアニストでいたいから……。

最後に、私の一番好きな言葉を記述しておく。

「音楽をするという事は、愛するものより一層 愛することだ。」

Honore de Balzac
(1799～1850)



就職活動 —私の場合—

国文科2年 中島由美

就職。それは、ほとんどの人が経験する困難な壁である。私は今年、その人生の転換期を迎え、この夏、就職活動に精を出した。

早ければ早いほど良いというもの、何からしてよいのかわからず7月下旬から活動を開始した。実際、こんなにも気を使い体力を使うものとは思わなかった。8月には会社訪問や試験があったが準備不足のためうまくいかなかった。9月が一番精神的にまいってしまっていた時期で、食事が通らなくなってくる。そうなる、いいようのない不安感がせまってきた、自分は就職ができないのではないかと考えてしまうようになった。

この時期、社会に出るのが怖くなり、いっそ遠くへ行ってしまうと現実から逃げ出したくなっていた。こんな事を考えるのも、夏休みの中の単独行動という孤独な活動のためだ。就職活動は全く新しい経験のため、未知の不安が大きいのに、単独の活動で助言をしてくれる人もなく、自分の考えだけで動くというのは大変苦しいものだった。私は書店に出ている就職関係の本にたよるしかなかった。

だが、この本をまるきり信じてしまうのは大変危険であった。就職常識のウソとホントがあるわけである。現代は情報が早く伝達する時代であるが、確かな情報というのは、なかなか得られないものである。「情報に踊る」風潮と「友達志向」が就職戦線混乱の元凶であると、某就職雑誌に書かれていたが、まさに今の著者の弱点を鋭くついている指摘だと思った。私も例外ではなかった。信じられるのは、自分の足で得た情報である。大事な事は、周りの情報に振り回されず、真実を見極めることである。

そのためには、会社訪問をなるべく多くする

ことである。同じ業種ばかりでなく、いろいろな違った業種の会社を訪問し比べてみるべきである。そうやって動いているうちに自分の適した業種がみえてくる。

もう一つ確実な情報としては、志望する会社に入社している卒業生に電話をすることだ。これほど確実で有力な情報はない。先輩の成功談、アドバイス、励ましを聞くと、そこに入れるような気がして大変心強くなる。先輩の話を聞いたりすると、就職は大学に入る前から考えていなければいけないことがわかるのだ。

それは、上田女子短大の履歴書の欄には、「学生時代に最も熱心に取り組んだこと」「志望の動機、就職についての考え」「その他(これも学生時代に学んだこと)」というスペースがだいぶある。この欄をかなり、しっかりとした意見で、かつ個性が出ていれば面接は有利な方向にむくのである。かなり煮つまった考えと、ありきたりでない他人とは違う意見が、やはり目を引くらしい。そして重要な点は、その得たものを、これからどう生かして行くかである。とくに国文科は、すぐに役立つ勉強をしているわけではない。面接で「あなたが国文科を出たことで、この会社にどんなメリットがありますか?」という質問をされた友達がいたほどだ。これは、国文科で何を勉強し、どんなことを得ようとしているのか、はっきりしているならば、出てくる答えなのである。そのためには、その事について考え、友達と討議してみる必要がある。本当に自分が何をしたいか、これを頭に入れて、職業を選択してほしいと実感している。また、企業に選ばれるのではなく、自分が企業を選ぶくらいの気迫がなくては難関は突破できないということも強く実感している。

私のイギリス体験記

幼児教育科1年 森 千 恵

もしもこのままここにいたらどうなるだろう。そんなことを考えながら、部屋の窓からいつもと変わらない風景を眺めていた。この風景も今日で最後かと思うと、向かいの家のおばあさんが、花に水をくれている姿にまで涙が出そうになっていた。部屋の中には、私がここに来た時と同じ様に、スーツケースだけがポツンとしていた。

一カ月前、以前からの夢『ホームステイ』を決行。「それじゃ行ってくるから。」何も考えず飛行機に乗った私だった。

ロンドンの駅で、ふと周りを見ると、外人ばかり、英語ばかり。今考えると当たり前のことだけれど、感動すると同時に、本当にあせってしまいました。あっ私は英語が話せないんだ…。大きなスーツケースを運びながら、もう心細くて仕方なかった。日本語が通じないこの国で、一カ月間も過ごすなんて…。ステイ先の家に着いてからも、そればかり考えていた。おまけに外は雨。本当に帰りたと思った。

それがどうしたことか、何にでも順応し易い私はいつの間にか、すっかり英国人になりきっていた。家を朝8時半に出て、学校へ行き、お昼になると近くの海岸へ行き、サンドイッチをかじる。午後は近くの街まで探検に出かけ、6時のポテト・ビーンズ、肉のディナーに間に合う様に家へ帰る。その後は又、外出。海へ行ってフランスの燈台を見て感動したり、ディスコへ『社会見学』に行ったりと、習慣的になっている行動を楽しんだ。

イギリスに来てから二週間、三週間と経つにつれて、自分に度胸がついてきたことに気付いた。フラフラと一人でロンドンの街を歩いていて、突然英語がとびかかってきても、笑って答

ることができた。それは語学力の問題ではない。私もそうだったのだが、日本人というのは文法ばかりを気にして、なかなか声が出ないのだ。言葉なんて、要は通じさえすればいいのだからどンドンためすべきだ。私はそれに気付いたのが遅すぎて、最初の頃の尻ごみが今でも後悔されている。使わなければ、自分の語学力というものがあるのどのくらいのレベルなのか、知ることができない。それを知って、自分の不勉強さを感じた。ただそれだけでもイギリスまで来た価値はあると私は思う。

最後のEnglish Breakfastを食べながら、この一ヶ月のことを、いろいろ思い出していた。こんなにも中身の濃い夏休みを過ごしたのは初めてだった。

朝食後、家中を歩きまわった。どの部屋にも思い出がつまっていた。「タクシーが来たわよ。」ママの声を聞いた途端に涙があふれた。私のとんでもない英語を理解してくれた人達、ランチを食べた浜辺、学校までの道のり、カモメ、そんなものすべてに愛着がわいてしまっていた。涙で上手く言葉にならない私の肩を抱いて、「又、来なさいね。」ママの言葉に、一生懸命、「もちろん。」と答えた。



創作 —作りだすことの楽しさ—



国文科1年 井出美和子

私の記憶の片隅に、今でも目を閉じると鮮明に浮かびあがってくる思い出があります。それは、私にとって忘れることができない、いえ、忘れてはならない大切な思い出です。——私が小学校低学年の頃のことです。その頃の私と2つ年下の弟の就寝時間は8時か8時30分ぐらいでした。しかし、いくら就寝時間だといっても、布団の中に入って、すぐ寝入ることができない私達2人は、どちらかが寝入るまで（大抵弟の方が先に寝入ったのですが）おしゃべりをしていくことが常でした。そして、いつの間にか、そのおしゃべりの時間が、私のお話の時間へと変わっていきました。それも昔話や童話ではなく、自分でその場でつくったもの、つまり創作したお話でした。私自身幼い上に、その場の思いつきで話していたので、もちろん筋も何もありませんでした。が、とにかく自分自身楽しかったのです。弟も結構喜んでくれました。特にうさぎが何をどうした、などというお話は、保育園か小学校にあがったばかりぐらいの弟には私以上に楽しかったらしいのです。「ね、お話してあげようか」と言えば、すぐに「うん。やってやってえ」と答えていました。こうして毎日のように、私の結末のないお話が寝床に響き渡っていました。私の学童期は、このようにして過ぎていったのです。

このような経験が元になり、現在でも私は、創作ということを一つの楽しみにしています。暇があればどこでも、頭の中は想像したことではいっぱいになります。ただ、想像したり創作したりした事柄を、まだ紙面に書いたことがありません。もちろん、何度も書くことに挑戦しましたが、頭の中でだけで考え作りあげたものは、うまく書き出すことができないのです。

中学生頃までは、まだそれでもよかったのですが、やはり、次第にそれだけでは満足できなくなり、書く練習が専門的にできるこの短大の国文科表現コースを選択したというわけなのです。ここで学べば、きっと書けるようになる、そんな気がしています。

今、改めて自分自身の過去の創作活動（こう呼べるか不安ですが）を考えてみて、私は、想像し創作していた自分の周囲の環境が、すばらしく良かったのではないかとおもわれてなりません。野山を走りまわりながらいろいろな想像をし、自分達自身で遊びを考えたり、おままごとなどで自分達自身でお話を作って遊んだり、頭の中で考えを巡らすことを自然にしていたのです。ですから、自然と想像力・創作力が身につけてきていたのです。人それぞれで、素質などの先天的な理由もあるでしょうが、環境などの影響という後天的な理由からいえば、現在の子供達より恵まれていたと思っています。

創作とは、決して身構えてはいけないものだと思います。自然に、そして自分の想像していくままでよいのです。そうすれば楽しみも増すでしょうし、決して型にはまった堅苦しいものではなくなるでしょう。私は「創作」の世界を夢や想像で満ちた楽しい世界として、いつまでも付き合っていきたいと考えています。



【図書館ガイド】

本学図書館のコンピューター化計画について

この図書館ガイドは、図書館をより効果的に利用できるように種々のことを解り易く説明するためのものです。今回は「図書館のコンピューター化」について簡単に説明します。

1. 何故コンピューター化する必要があるのか

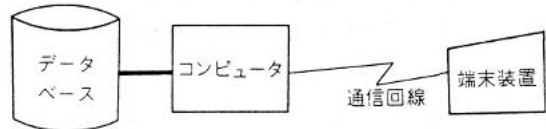
日本の図書館は昭和50～60年代にかけて急速に新館ラッシュをむかえ、十年間で公共図書館数が今までの1.7倍近くに増加した。

図書館界にとってまさに“躍進の十年”と呼ばれ、図書館が世間から注目をあびるようになった。

この新館ラッシュに比して、蔵書、図書費、職員等の問題は今一つ豊かにならず、図書館数が増加したというだけで、情報サービス面では遅れをとっている。すでに銀行がバンキング・サービスだけでなく、図書館の郷土資料や、地域行事・観光・生活情報等を提供するようになってきた。(県内では八十二銀行が文化情報検索システムを構築し、サービスを開始している。)

このように民間サイドにより情報の提供サービスが行われていくと、図書館は銀行等にサービスを封じ込まれるのではないかという声も上ってくるのは当然である。これに比べ、図書館は膨大な情報量を持つ割合には、検索サービス面では旧態依然としてカード検索にたよっているから利用者の要望を充分満たすことができない。その上、個々の図書館は財政的に貧しいので、一館だけであらゆる出版物を集める等ということは不可能である。

そこで、お互いにある書誌情報を交換することにより、完全網羅し、各館が端末機によって読み取り、利用者に迅速に情報の提供をする必要性が生じてきているわけである。我国では、文部省が学術情報センターを中心に、まず国立大学間でのネットワーク化のため着々準備が進んでいる。



オンライン情報検索の仕組

2. コンピューターシステムの概要

ではコンピューターを導入するとどうなるのか。ハードが入るといきなりオンライン化され、通信回線で検索できるというわけにはいかない。今のところ導入館のほとんどが、データベース作りに躍起となっており、ぼつぼつ稼動を開始した館もある。

まず、自館のデータベースを作成しなければならない。昨今どの図書館もコンピューター化を本腰で考え始めている最大の理由に、最近のコンピューターのめざましい進歩があげられる。

性能が上り、価格が下り、十数年前何千万円もしたコンピューターが、今や30～40万円クラスのパソコンに変わってきている。このことが、図書館にとって機械化しやすくなった大きな原因である。

図書館業務は管理(発注・受入・支払)→整理(目録・分類・件名)→奉仕(貸出・レファレンス)という大きな流れののって行なわれ、サービスが利用者に提供される。又幾度か述べている相互貸借も大事な業務である。それら全体をトータルで機械化している館もあるし、ある固有部門のみコンピューター化という館もある。

我々図書館員がまず第一に取り組みたいのは、整理部門である。本学のような中小図書館では受入、奉仕とも毎日、何百・何千とあるわけで

はないので、今まで通り手作業でも可能であるが、増加一方の図書の管理、特に目録化は、1～2万冊のうちにはよいが、5万、10万冊となるとカード上からの検索では不十分である。又カード検索の不便な点はフルネームでしか引けないことであり、探している資料名がうろ覚えだと目的図書にたどりつけない。これがコンピューターだと、例えば「教育」というタイトルが図書名のどこにあるかが、「教育」と字のつくタイトル名の図書は全部ディスプレイ上にプリントアウトされる。時間的にも瞬時にである。又全蔵書のデータ入力が終われば、蔵書点検等もバーコードで2～3日で出来、本確的な貸出業務の機械化も実現する。

利用者はキャッシュカード等と同様の利用カードを持ち、貸りたい図書と一緒にカウンターに提示すれば、先のバーコードで必要事項を読み取り手続は簡単に完了する。今までのように貸出票に手書きする必要もなく、又、プライバシーも守られる。予約や延滞状況も即座にわかる。

図書館側の管理面からは決算や各種統計がキーボタン一つでできてしまう点が大きいメリットである。要するにコンピューターは膨大な量の中から何かを探し出すという仕事に多大な威力を発揮するのである。

3. 図書館ネットワークとは

ネットワークという言葉は今や常識語であるが、図書館では相互貸借、相互利用の組織をこう呼んでいる。機器類の発達により郵便でやりとりしていたのが、コピーに変わり、テレタイプや、ファクシミリに変わって、以前より資料が利用者の手に早く届くようになった。

そこで、どこの館にどんな図書資料が所蔵されているのかわかれば、もっと便利ではないかということになり、今、各図書館がデータベース作りに忙がしいのはこのことである。

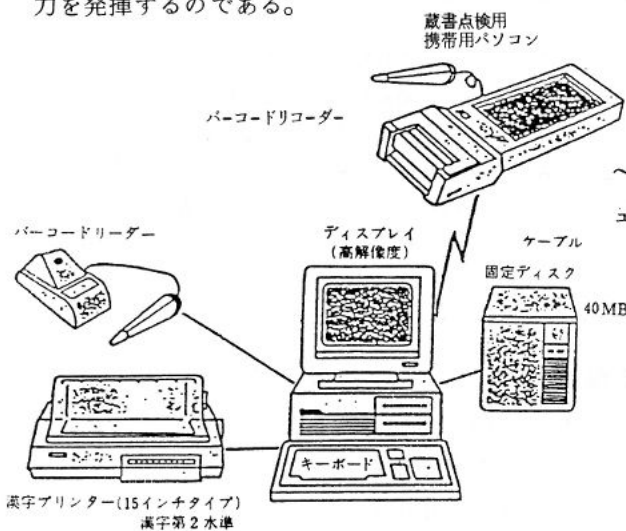
短大図書館間ではまだ具体的な構想は考えられていないが、長野県内の私立短期大学同志では、「コンピューターを導入する際は同機種で、同じソフトにしましょう。そしてお互いの蔵書をフロッピーに落して交換し、相互の蔵書内容がわかるようにしましょう」という話し合いが、先の長野県私立短大図書館研究会で確認されている。本年はM短大が導入にふみ切った。

それから、長野県の公共図書館間も同じネットワーク化を組む計画だということを知っており、上田市立図書館は機種選定が決ったとも伝えられているので、短大⇄公共図書館、短大⇄国立大学等のネットワーク化も夢ではない。

このように、我短大はまだまだコンピューターは導入出来ない等とってはおれない時期にさしかかってきた。

又、データベース構築に少なくとも3～4年の年月が必要なので、一日も早いコンピューターの導入が望まれるところである。

(長張)



(参考)

『新しい図書館』中村初雄編(日本図書館協会)

『図書館とコンピューター』坂本徹朗著(")

『図書館システムパッケージ総覧1987』

(紀井国屋書店)



Library information

— 視聴覚機器紹介 —

さすがに新人類と呼ばれる皆さん！ 目敏く見つけて活用してくれていますね。そこで、図書館よりお願いします。上田女子短大みんなの機械です。正しく、かつ丁寧に譲りあって使って下さい。(左写真)

— なに見たい？ なにが聞きたい？ —

視聴覚資料の購入希望大募集です！

せっかく機械がそろっているのに、視聴する資料が少ないのが悩みの種。皆さんの希望がありましたら、えんりよなく図書館員までお知らせ下さい。お待ちしております。

◇◇ 寄 贈 図 書 紹 介 ◇◇

9月で退職された天野文雄先生が懇意にされていた福田安男氏(元国立劇場参与)より、国立劇場上演資料集(歌舞伎公演)・国立劇場歌舞伎公演上演台本・文楽床本集・国立文楽劇場上演資料集など関係者以外入手することのでき

ない貴重な資料を寄贈していただきました。棚に展示されていますので、自由にご覧下さい。

尚、福田氏には紙上をもって、厚く御礼申し上げます。

編 集 後 記

コース制の実施、司書課程・司書教諭課程の新設、新校舎づくりなど、多彩で希望にあふれたプログラムが一斉に開花し、活力に満ち実り多い本年であった。この年をかえりみながら図書館だよりをまとめる。先生方には貴重な玉稿をいただき、また学生諸君の協力もえて、読みがいのあるたよりをもつことができました

たことを、心からお礼申し上げます。

活用あつての図書館に、単なる利用者としての立場を越え、その世話役を志す司書課程1年生80余名をも迎えた。図書館教育の基本に立ちかえて、その発展を期する好機ともなりえよう。全学の方々の研究に勉学にますますの利用を願いたい。(清水)

上田女子短期大学 図書館だより

第14号 1987.12 発行

編 集 上田女子短期大学図書委員会

発 行 上田女子短期大学附属図書館

〒386-12 長野県上田市下之郷620

(TEL 0268-38-2352)